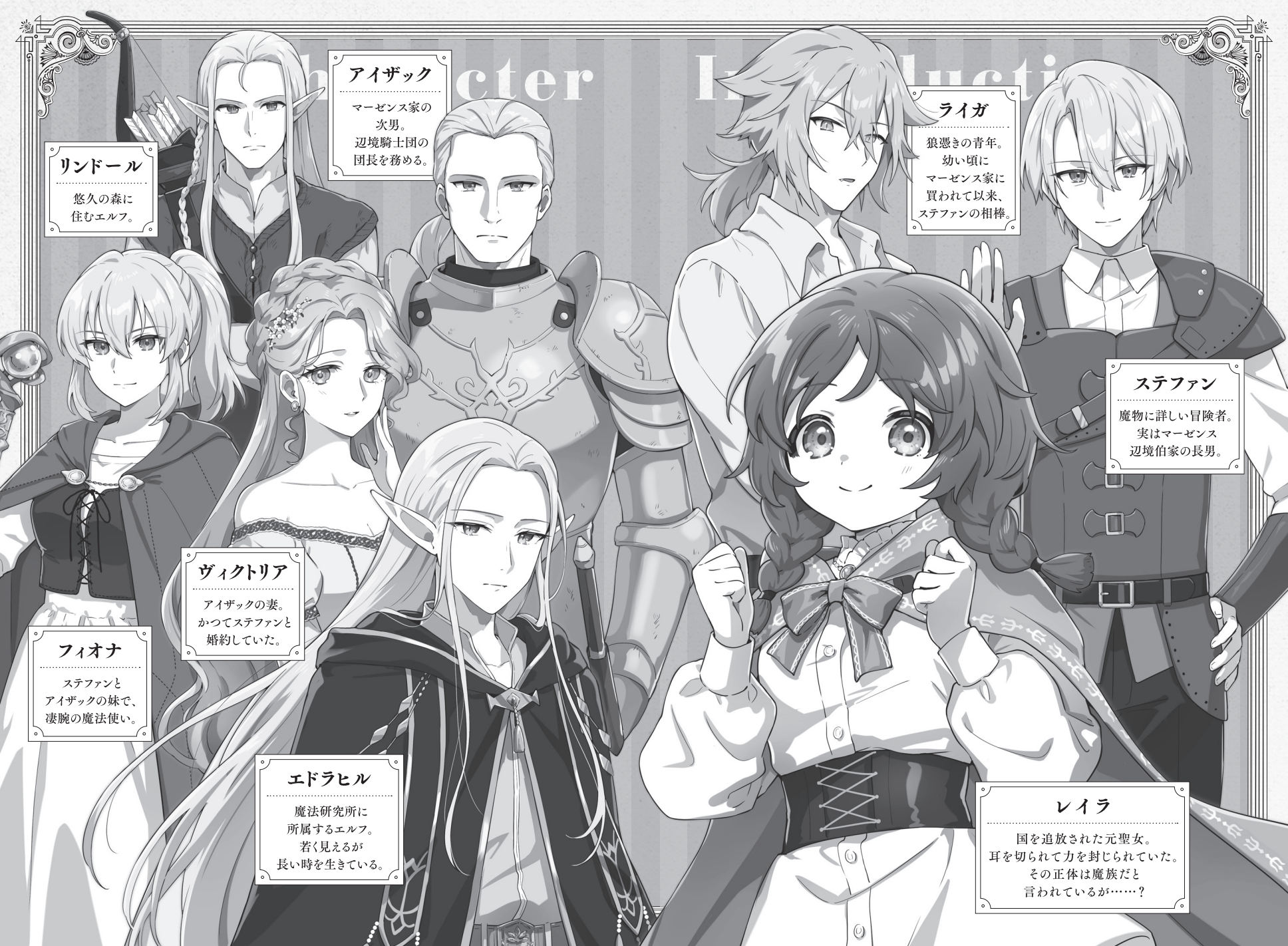
追放された元聖女は、冒険者として自由に生活します！

Tsuiho sareta moto seijo ha bokensha toshite jiyu ni seikatsu shimasu

3

夏灯みかん

[Illust] しんいし智歩


Character Introduction
リンドール
悠久の森に
住むエルフ。
アイザック
マーゼンス家の
次男。
辺境騎士団の
団長を務める。
ライガ
狼憑きの青年。
幼い頃に
マーゼンス家に
買われて以来、
ステファンの相棒。
ステファン
魔物に詳しい冒険者。
実はマーゼンス
辺境伯家の長男。
ヴィクトリア
アイザックの妻。
かつてステファンと
婚約していた。
フィオナ
ステファンと
アイザックの妹で、
凄腕の魔法使い。
エドラヒル
魔法研究所に
所属するエルフ。
若く見えるが
長い時を生きている。
レイラ
国を追放された元聖女。
耳を切られて力を封じられていた。
その正体は魔族だと
言われているが……？

第一章　元聖女は魔法都市でエルフに会いました

朝もやの向こうで、空と海が溶け合っている。
マルコフ王国がある東大陸を発って、二日。
私は船の甲板に立ち、まだ見えない目的地を探して目を凝らしていた。
この先に……お父さんのことを知っているかもしれないエルフが暮らす、魔法都市がある。
そう思うと期待と不安が入り交じって、心臓の鼓動が速くなった。
「お前、朝早くからよく飽きないな……。景色なんて変わらないじゃん」
人間姿のライガが青い顔で私に声をかける。
「だって、海の上に浮かんでるんだよ！　地面がないなんて、すごい!!」
「地面……早く地面に立ちたい……」
船酔いしているライガは深く溜め息をついて、口を押さえてうずくまった。
かわいそう……。ライガは一日目の途中からずっとこんな感じだ。
ステファンによると「獣人は船が苦手」なんだそうだ。
「部屋に戻ったら？」

エイダン様からもらったお金で高い船室を取ったので、広い部屋には横になれるベッドがある。
「部屋のほうが揺れるから、外のほうがまだマシだ……」
ライガは「ううう」と呻いた。
私はライガの背中をさすりながら、もやの向こうを見た。
だんだん明るくなっていく景色の奥に、陸と、たくさんの建物が見えた。
「ライガ！　陸が見えるよ!!」
そう叫んで肩を叩くと、ライガが飛び上がった。
「陸！　陸だぁ！　やった！　陸!!」
……よっぽど船から降りたかったみたい。船が港に着くと、ライガは錨が下ろされる前に狼化して船着き場へ飛び降りた。港にいた人たちが悲鳴を上げ、ステファンは頭を抱えていた。
「――ここが、魔法都市ですか？」
「そう。魔法使いギルド本部がある、リュクサリアだ」
私とステファンはそんな話をしながら、他のお客さんと一緒に並んで船を下りた。
港の検問で冒険者証とマルコフ王国の魔法使いギルドからの手紙を見せ、街へ入る。
港を出てすぐの広場で、私は足を止めた。カラフルな服を着た人が、宙を漂う紙風船を配っている。子どもが紙風船で遊ぶところは見たことがあるけど……なんで浮いているんだろう？
「お嬢ちゃん、紙風船をあげよう。今夜、広場で魔法ショーをやるから観においで」
その人は私に、浮かぶ紙風船を一つ手渡してくれた。

風船はあっちこっちへふわふわ動きまわり、紐を持っていないと飛んでいってしまいそうだ。
「中に興奮した風の精霊が入っているんだね。夜、時間があったら魔法ショーを観に行こうか」
ステファンが紙風船を見上げて微笑んだ。
広場を出ると、なだらかな坂がずっと続いていた。坂の両側には赤い煉瓦造りの建物がびっしりと並んでいる。ソーニャが話していた通り、とても都会だ。
「とりあえず、ソーニャのお祖父さんの家に行こうか」
ステファンにつられて坂の上を見上げた。上へ行くほど、大きな屋敷が建っている。
私たちはしばらく歩き、坂の真ん中辺りに建つ大きなお屋敷へ辿りついた。
「あいつの家、本当に金持ちだったんだな……」
ライガがお屋敷を眺めて呟く。私はふわふわ浮かぶ紙風船をつかんで潰した。
ぷしゅっと音がして、中から風が吹き出す。さすがに、風船を持ってご挨拶は失礼だものね。
門のところで、ステファンがソーニャから預かってきた手紙を門番に見せる。
しばらくすると、黒いローブを着た、長い白髪のおじいさんが出てきた。
「――孫娘がお世話になっているようで」
おじいさんはそう言って、私たちに挨拶した。
「あなたがソーニャのお祖父様のオリヴァー・シュゼイン様ですか？」
ステファンが尋ねると、おじいさんは眼鏡を持ち上げて「いかにも」と答えた。
この人が、ソーニャのお祖父さん！

ステファンは持っていた手紙をオリヴァーさんに渡した。
「ソーニャさんから、お祖父様にお渡しするよう頼まれてきました。僕はステファンと申します。こちらがライガとレイラです」
「サミュエルからも話は聞いている。あいつも儂の弟子なんじゃよ。……長旅だったろう。とりあえず、荷物でも置いて一息つきなさい」
オリヴァーさんは後ろを向くと、手に持った長い杖を地面にコンッと打ちつける。
すると黒いローブを着た若い人たちがわらわらとやってきて、私たちの荷物を持ってくれた。
――この人たちも魔法使い？
「ソーニャのお父さんやお母さんは、ここにはいないのかな？」
私が小声でステファンに聞くと、オリヴァーさんがくるっと振り返った。
「娘夫婦はアスガルドの王都にいる。ここに住んでいるのは儂と弟子たちだよ。ソーニャにも儂がここで魔法を教えていた。この屋敷は魔法学校の寮も兼ねている」
それから白い髭を触りながら、笑った。
「ソーニャは――末の孫娘だもんで、だいぶ甘くしてしまってな。娘に……ソーニャの母親に言われて、遠方へ研修に出したのだ」
オリヴァーさんは懐かしそうに目を細めた。
「最初の頃は『帰りたい』とばかり手紙に書いていたので心配しておった。だから、良い人たちにパーティーを組んでもらえたと知らせてきた時は安心したよ。……お前さんたちだろう、ソーニャとパーティーを組んでくれたのは」
ステファンとライガは顔を見合わせた。
「……短い間だけどな」
ライガが「良い人」という言葉に照れたのか、気まずそうに肩をすくめて呟いた。
オリヴァーさんは髭を揺らして笑った。
「部屋は空いている。好きなだけ滞在すればいい」
「ありがとうございます」とお礼を言ってから、私は聞いた。
「エドラヒル、という名のエルフの方にお会いしたいんです。魔法使いギルド本部にいらっしゃるんですか？」
お父さんのことがわかるかもしれないと思うと、胸が落ち着かなかった。
少しでも早く会って、話を聞きたい。
「おお、エドラヒルな……。あいつは、たいてい山の手の魔法研究所にいるよ。今日の午後でよければ、早速案内してやろう」
「ありがとうございます。――それから、これを治せる魔法使いをご存じありませんか？」
ステファンが荷物から、瓶に入った私の耳を取り出して見せた。
オリヴァーさんは「ほぉ」と呟き、瓶をいろいろな角度からしげしげと眺めた。
――自分の身体の一部を見られていると思うと、恥ずかしい。
私は思わずローブのフードをかぶって頭を押さえた。

「だいぶ干からびておるの。――しかし、エドラヒルなら治せるだろう」
オリヴァーさんは頷いた。
「あいつの専門は生命魔法だからな」

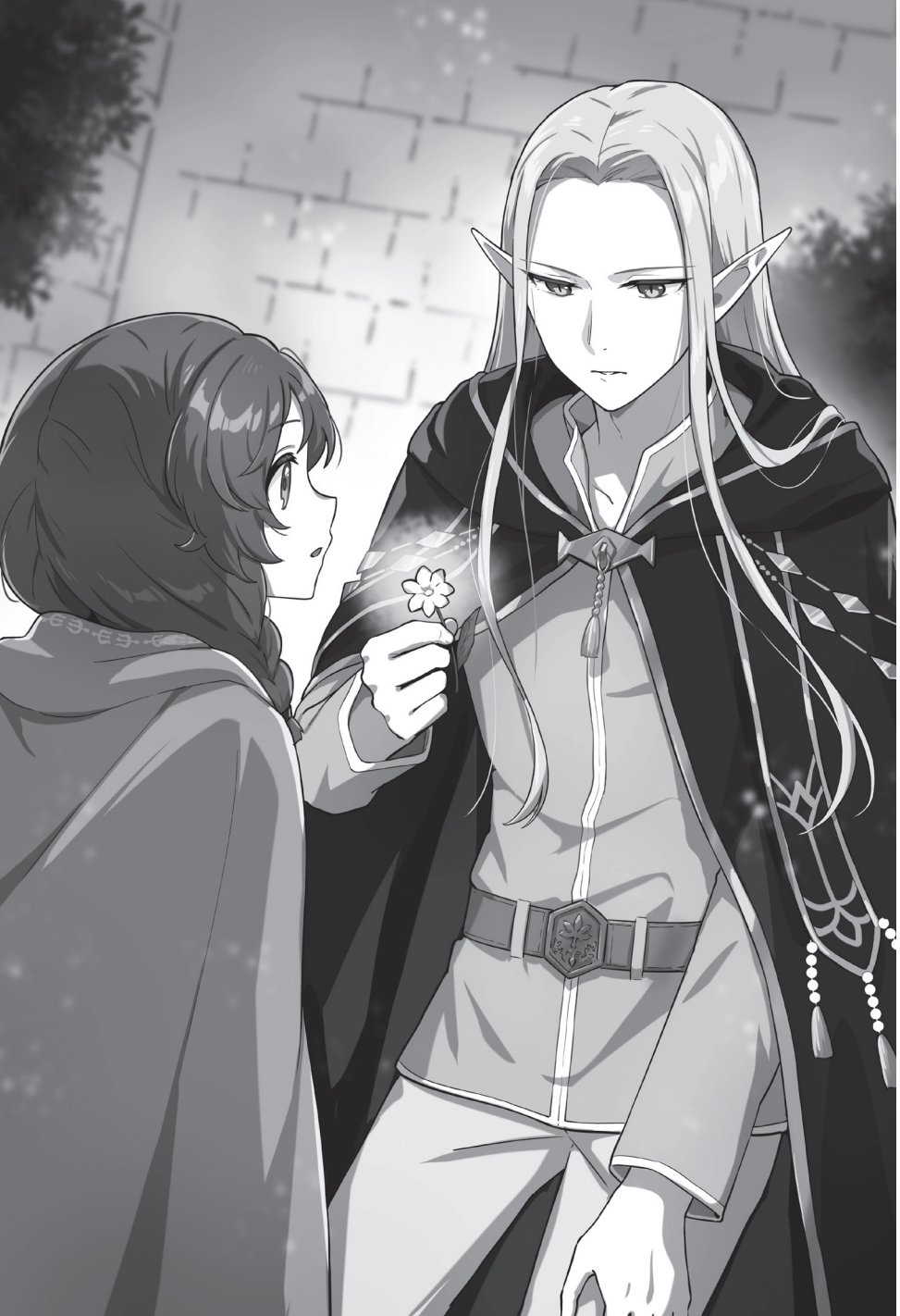
◇◇◇

エドラヒルさんがいるという魔法研究所は、坂をずっと上った高台にあった。
石積みの大きな建物で、屋根は真っ黒に塗られている。オリヴァーさんのお屋敷とは違い、塔や中庭がいくつもある複雑な造りだ。
「……お城みたいですね」
「百年ほど前までは、アスガルド国王の離宮だったそうだ。当時の屋根は赤かったそうで――エドラヒルは実物を見たことがあると言っていたな」
「ひゃくねん……」
思わず呟くと、オリヴァーさんは笑った。
「儂が生まれるよりも昔の話だな。魔法研究所になったのは八十年ほど前だ」
エルフは寿命が長いとは聞いていた。でも百年前を「見たことがある」と言われると、その長さが急に現実味を帯びてくる。そして、魔族も寿命が長いことを私は思い出した。
……ということは、私もそんなに長生きするってこと……？

私たちは、かつて城だったという魔法研究所の中へ入っていった。
建物の中には黒いローブの人たちが行き交っていて、通りすがるたびにオリヴァーさんへ挨拶した。
オリヴァーさんはどんどん奥へ進み、狭い階段をぐるぐると上って、複雑な通路を迷いなく歩いていった。置いていかれたら迷子になってしまいそうだ。
私たちはオリヴァーさんの背中を速足で追いかけた。
今度は狭い階段をぐるぐる下りると、私たちは開けたところに出た。
そこはお城の壁に囲まれた裏庭だった。四角く区切られた花壇には色とりどりの草花が咲き、蝶や蜂が飛びまわっていた。
「わぁ、綺麗！」
思わずそう言って花壇に駆け寄ると――
「私の庭に近づくな」
凛とした鋭い声が響いた。
顔を上げると、花壇の奥にいた人が怪訝そうにこちらを見ていた。
長く尖った耳。さらりとした長い銀の髪が風に揺れた。
「ご、ごめんなさい！」
そう言って頭を下げ、後ずさる。
――この人って……

「エドラヒル！　お客さんだ。お前に話を聞きたい者が来ると、前に話していただろう」
オリヴァーさんが呆れたように声をかける。
……やっぱり、エルフのエドラヒルさんだ。どうしよう、怒らせてしまったかな？
「エドラヒルって、女なのか？」
ライガが首を捻って私に聞いた。
確かに、一目見ただけだと、背の高い綺麗な女の人に見える。
まるで仕立屋さんの店先に飾られた人形が、そのまま動き出したみたいな人だった。
見た目は、ステファンと同じくらい――二十代前半に見える。
エドラヒルさんは顔をしかめて、ライガを見た。
「私は男だが――狼憑きが私になんの用だ。道理で空気が濁るはずだ」
ライガ……今は人間の姿なのに、狼男だってわかるんだ。
「あ？」とライガが拳を握りかけたので、ステファンが慌ててその肩を押さえた。
「それに」と付け加えて、エドラヒルさんは私に紫色の瞳を向ける。
「本当に来たのか。魔族が私になんの用――」
言いかけた言葉を呑み込んで、エドラヒルさんは顎に手を置くと、首をかしげて私を凝視した。
「――いや――？　魔族？　――か？」
しばらく黙り込んだ後、つかつかと近づいてきて、腰を落として視線を合わせる。
「……いや、違うな。――お前は、なんだ？」

……それを確かめに、ここに来たのだけれど。
私は返事ができず、瞬きを繰り返した。
エドラヒルさんはしげしげと私を上から下まで眺めた。
そんなに見ないでほしい……と思った時、「てい」とオリヴァーさんがエドラヒルさんの背中を杖で小突いた。
「……なんだ、オリヴァーよ」
「エドラヒル！　遠路はるばる訪ねてきてくれた客人に対して、そんな態度は失礼だろう」
エドラヒルさんはびっくりしたように目を見開いてから、オリヴァーさんを見つめた。
「……失礼か……」
「そうだ。名前も名乗らずに、『なんの用』はないだろう。まず挨拶をせい、挨拶を」
オリヴァーさんに急かされ、エドラヒルさんは私たちに向かって名乗った。
「……エドラヒルだ」
「――はじめまして、レイラです」
「ステファンと申します。マルコフ王国の王都魔法使いギルドのサミュエルさんのご紹介で、あなたにお話を伺いにまいりました」
「ライガだ」
ステファンとライガも続けて名乗る。
オリヴァーさんが「すまんね」と笑った。



「こいつはエルフだからか知らんが、自分の領域に知らない者が入ってくるのが苦手でな。怒っているわけではないんだ。悪いやつではないんだがな、ちょっと失礼なやつなんじゃよ」
『ちょっと失礼なやつ』って、オリヴァーさんも、なかなかずばっと言うなあ……
「……悪かった。失礼な態度をとるつもりはなかった」
エドラヒルさんは銀の髪を指先で弄びながら、気まずそうに詫びた。
確かに……ちょっと、変わった人かもしれない。
私はステファンと顔を見合わせてから、頭を下げた。
「さっきはお庭に勝手に近づいて、すみませんでした。とてもお花が綺麗だったので、思わず……」
そう言うと、エドラヒルさんは首をかしげた。
「花を、綺麗だと思うのだな」
「ええ――お花は好きです」
「どの花が好きだ」
エドラヒルさんは、花壇を指さした。
どの花って……みんな綺麗だけど、選んだほうがいいのかな。
「ええっと……この白いお花が、小さくて可愛いですね」
小さな白い花を指さすと、エドラヒルさんはそれを手折って私に差し出した。
「やろう」
「あ、ありがとうございます……？」

嬉しいけど、少し戸惑う。お詫びの気持ち、ということなのかな。
悪い人では、ないよね……変な人だけれど。
花を受け取ると、エドラヒルさんは、大きく息を吐いてから、私に向き直った。
「それよりも――魔族が会いに来ると聞いていたが、お前は……純粋な魔族ではないな」
「……え」
――純粋な魔族じゃないって、どういうこと？
「エルフの魔力が混ざっている。――そんなことがありえるのか？」
エドラヒルさんは自問自答するように、顎に手を置いて考え込んでしまった。
私、エルフが混ざっているの？
ライガが首をかしげた。
「そんなのわかるのかよ？」
「気配でわかる。魔族の気は濁った沼のようだが、エルフの気は朝の澄んだ森の空気に似ている」
わかるような、わからないような表現だ。『濁った沼』って……なに？
私は濁った沼と朝の澄んだ森の空気が混ざっているってこと？
首をかしげていると、ライガが聞きにくそうに呟いた。
「狼男は……」
「淀んだ溜め池のような感じがする。ああ、でもお前は他の狼憑きよりだいぶ人に近い。濁りも、街の水溜まりくらいだ」

「エルフは感覚が過敏だからな。こいつの言語表現は見逃してやってくれ。悪意はないんだよ、悪意は」
オリヴァーさんが苦笑して、なにか言いたげなライガの肩を叩いた。
「……『魔物度』のようなものでしょうか」
ステファンがちょっと考えたように言った。
「なんだよ『魔物度』って」
「いや、そういう言葉があるわけじゃないけど、ほら、魔物の魔力って濁っているというか、純粋な精霊の力が少し変質した状態だろ。そういう濁りの度合いじゃないかな」
「お前、ステファンといったか。そうだ。そういう感じだ。この娘は、エルフの魔力と、魔族の魔力が混ざっている。こんな者は見たことがない」
エドラヒルさんは、それからステファンをまじまじと見た。
「お前……？」
「……なんでしょうか？」
エドラヒルさんは改めてステファンの顔を眺めてから、首を横に振った。
「――いや、少し知り合いに似ている気がしただけだ」
ステファンは首をかしげてから、話を戻した。
「レイラは、エルフと魔族の血が混ざっている、ということですか？」
エドラヒルさんはまた、思案するように呟いた。

「そうだ。……そうなんだ。そんなことがあるか？」
一人で考え込んでいるエドラヒルさんに、ステファンが問いかけた。
「レイラの父親と思われる耳の長い男性が、十四年前、アスガルドの端にあったミアラという村の宿屋に寄った後、行方不明になったそうです。近くでエルフの内輪揉めがあったとか。あなたはなにかご存じですか？」
エドラヒルさんは、はっと目を見開いた。その反応に期待が膨らむ。
だけど、返事は……
「――知らない」
私は肩を落とした。
そうそううまく「知っています」とはならないよね……
「私は故郷の森を出てから人の暦で五十年以上、一度も帰っていない。だから森の内情はわからない。……だが」
エドラヒルさんは語調を強くした。
「なにか揉め事はあったのだろう。この娘の父親がエルフなら、母親のほうが魔族ということになる。そんなことがあったのであれば、里にとっては大事件だ」
お父さんがエルフで、お母さんが魔族？
私は今まで考えたことのなかった可能性に何度も瞬きした。
「エルフと魔族の混血……ってことか？」

ライガが聞いてくれた。
「遠い昔、魔族と私たちエルフは同じ種族だったという。やつらは魔物のように血肉や負の魔力を食糧とし、私たちは森で草花の生気を糧とする生き方を選んだ。だから、エルフと魔族の間に子どもが生まれても、ありえない話ではないのかもしれないが」
エドラヒルさんは厳しい顔で唸った。
「さんざん身内を喰った魔族との間に子を持つなど、里で許されるはずがない」
「それが原因で、お父さんはエルフの人たちに捕まって、戻ってこなかった……ってことでしょうか……」
お父さん……私が原因で、捕まったってこと？
「許されないって……どうなっちゃうんですか……？」
体の芯が冷えた気がして、私は言葉を詰まらせた。まさか――
「死罪……みたいな、ことですか？」
「それはないだろう」とエドラヒルさんは首を横に振った。
「お前の父親がエルフなら、死罪はないと思う。同族を殺すことはないだろう。一生幽閉くらいだろうか」
エドラヒルさんは言葉を切った。
「だが、お前が原因ではないだろう。里の連中がお前の存在を知っているとは思えない。知っていれば、必ずお前を捜しに行くだろう。それがないということは、お前の父親だという男は、お前の

ことを話していないはずだ」
それから私を見つめ、矢継ぎ早に質問した。
「お前の父親は、本当にエルフなのか？　母親がエルフで、父親が魔族なのでは？　父親はどんな姿をしていた？」
私は記憶を辿った。
「お父さんは、耳が長くて、長い金色の髪で、目は緑だったと、思います……」
「なるほど。髪の色が金ならばエルフの可能性は高いかもしれない。魔族は黒髪が多いと聞く」
私は思わず身を乗り出した。
「……その、エルフの里に行けば、お父さんに会えるんでしょうか……」
エドラヒルさんは押し黙った。
「お前を里の連中が見つけたら、大騒ぎになるだろう。お前は純粋な魔族ではないし、まだ子どもだ。殺されることはないだろうが――父親と仲良く幽閉してもらえるかもしれないな」
――幽閉。
大神殿の、狭い祈りの間を思い出す。もう狭いところに閉じ込められるのは、嫌……！
エドラヒルさんは大きく溜め息をついた。
「私は里にお前のことを知らせるつもりはないし――その父親のことは忘れて、どこかに潜んで暮らしたほうがお前の身のためだと思うがね」
そんな……せっかくここまで来たのに……

うつむく私の背中を、ステファンが励ますようにぽんぽんと叩いた。
「――エドラヒルさん、もう一つ伺いたいことがあるんですが……これを治せますか？」
ステファンは瓶に入った私の耳をエドラヒルさんに見せた。
息を呑む音が聞こえた。
「耳が、短いから……おかしいとは思っていたが」
信じられないというような口調で、エドラヒルさんは口をぱくぱくさせた。
「どうしてこんなことに？」
「……大司教様に、切られちゃったみたいです……」
私の返事に、エドラヒルさんは眉を吊り上げた。
「誰だ、その大司教というのは」
「魔法使いギルド内で騒ぎになっとったのに、知らないとは呆れたわい」
オリヴァーさんは溜め息をついた。
「先日、弟子のサミュエルが捕らえて連れてきた、海の向こうのキアーラという国の者だよ。魔物密売人のレイヴィスに多額の金を流しとった。本部の裁判待ちで牢にいる。この子は、その大司教に買われたらしい」
「……ひどいことをする」
エドラヒルさんは不快そうに眉をひそめ、ステファンから瓶を受け取ると、自分の耳を押さえて黙り込んだ。それから、私を見て頷いた。

「――少し時間はかかるが、治せると思う。それくらいはやってやろう」
……耳、治るんだ。嬉しい。けれど治ったらどうなるのか想像がつかず、変な気持ちにもなる。
私は「ありがとうございます」と頭を下げた。
「構わん。これは預かろう。まずこれを生きた状態に戻してから、お前の耳につけてやる」
そう言ってエドラヒルさんは私たちに背を向ける。
「話が済んだなら、帰ってくれ。私は植物の世話で忙しい」
私はステファンやライガと顔を見合わせ、その場を去ることにした。
……結局、お父さんのことは、どうしたらいいのかわからないままだ。
うなだれる私に、オリヴァーさんが励ますように言ってくれた。
「そんなに気落ちしなさんな。この街に滞在中は、儂の家でゆっくりしなさい」
「……ありがとうございます」
「そうだ、今日はこの魔法研究所の食堂で、歓迎のご馳走を弟子に作らせよう。エドラヒルが育てた魔法野菜や、珍しいものを食べさせてやるぞ」
オリヴァーさんは白い髭を揺らして笑った。

◇◇◇

夕方、私たちはオリヴァーさんのお弟子さん十人くらいと、魔法研究所の食堂で食卓を囲んだ。

大皿がいくつも机の上に並んでいる。みんな好きなように取り皿に取って食べるそうだ。
サイコロ状に切って焼かれたいろんな種類のお肉と、色とりどりの野菜がそれぞれ大きな皿に盛られている。それをカラフルなソースにつけて食べるらしい。
「……豪快ですね……」
ステファンが呟いた。
「人数が多いからの。これが一番楽なんだ」
オリヴァーさんは笑いながら、真っ黒なお肉をフォークで突き刺す。
……焦げているわけじゃないけど、真っ黒。とても硬そうだ。
「これは、黒竜の肉だ。儂らも普段から食べるもんじゃないがな、冷凍して保存しておったものを出してみた。食べてみなさい」
「竜……ですか……」
私はフォークに刺さった黒いお肉をじーっと見た。
竜の卵は食べたらおいしいかなって考えたことはあるけど、本体は考えたことなかった。
「黒竜はちょっと苦みがあるから、この火のマンドレイクのソースでピリッと食べるといいよ」
オリヴァーさんは赤い渦がゆらゆら揺れているオレンジ色のソースを小さいお皿に注いで、私たちの前にそれぞれ置いてくれた。
ライガがお皿に顔を近づけて、その液体の匂いを嗅ぐ。
「……マンドレイクのソース……？　なんでこの赤いの、動いてるんだ？」

「魔力を込めているからな、魔力が動いているうちに食べてくれ」
魔力が動いているうちに食べる……って、変な表現。
「マンドレイク……あの足が生えて叫びながら突進してくる……大きなにんじんですよね……」
そう言うと、オリヴァーさんは声を立てて笑った。
「ははは、叫びながら突進してくるにんじん……的確な表現だ」
そんなに笑われると恥ずかしい……。オリヴァーさんは説明を続けた。
「それを潰して、調味料と混ぜた後に、炎の魔力を加えるとこのソースができる」
私はそのソースに黒竜のお肉をつけて口に入れた。
……？　説明しづらい味だった。噛みごたえのある硬めのお肉が、口の中で燃えたように感じた。辛いとかじゃなくて、燃えた感じ。そのすぐ後に、苦いんだけど癖になる旨味が広がる。噛むたびに口の中が熱くなって、額に汗がにじんだ。
「マンドレイクをこうやって食べるんですね」
ステファンも額の汗を拭いながら呟いた。
「魔力の回復に持ってこいなのでな。ただ……味が薄くて、そのまま食べるのがなかなかしんどくて……、エドラヒルがこのソースにする方法を考えたんじゃ。他にも氷の魔力を加えたひんやり食べるソースなんかもあるぞ。暑い夏に最適だ」
オリヴァーさんは、透明な渦がぐるぐる回る白いソースを見せた。
「これなら、無理なくたくさん食べられるだろう」

エドラヒルさんが考えた……。エルフも、お料理をするんだ。
机を見渡したけれど、当のエドラヒルさんの姿はない。
「オリヴァーさんは、エドラヒルさんと親しいんですね」
ステファンが聞くと、オリヴァーさんは笑った。
「もう五十年以上の付き合いになる。あいつを魔法使いギルドに紹介したのは儂だからな」
「五十年……」
オリヴァーさんが今みたいな白髪のおじいさんになる前から、二人は知り合いなんだ。
エドラヒルさんは、見た目はステファンやライガと変わらないのに。……何歳なんだろう。
「あいつは、初対面の人間にはちょっと棘があるが、悪いやつではないので、嫌わんでやっておくれ。――最近、古い友人が何人か続けて亡くなっての。そのせいか、庭に引きこもり気味でなぁ。今日も夕食に誘ったんだが、行かないと言って」
オリヴァーさんは困ったように笑って髭を撫でた。
不意に、ある考えが浮かぶ。もしかして私、五十年経っても今とあまり変わらないのかな……？
その時はステファンもライガも、オリヴァーさんみたいに白い髭のおじいさんになってる？
ごくっとお肉を呑み込むと、私はコップの水へ視線を落とした。
――お腹をいっぱいにした私たちは、オリヴァーさんのお屋敷に戻った。
広間に座って、お茶を飲みながら話す。
「新鮮な味がしたね……」

「魔法使いって、変わったもん食べてるんだな……」
「明日は、街のレストランに行ってみようか」
「おう、普通の料理が食べたい」
ステファンとライガが話しているのを聞きながら、私はずずずとお茶を飲んで、息を吐いた。
五十年後、百年後にどうなってるか……っていう想像が、頭から離れない。
「――レイラ？」
ステファンが私の顔を覗き込んだ。
「これから先、耳が治るまではこの街にいるとして、どうしたい？　エルフの里に行きたい？」
そう、そのこともあった。
「行って、お父さんのことを確認したいです。でも、私が行くと幽閉とか――物騒ですよね」
エドラヒルさんの言葉を思い出して、うつむいた。
行きたいのはやまやまだけど、行ったとしても無事で済むのか、どんなことになるのかわからなくて、『行きたい』とは、はっきり返事ができなかった。
『行きたい』って言ったら、たぶんステファンとライガはついてきてくれると思う。
また面倒なことに巻き込むなんて、申し訳ない……
「……手がないことはないんだ」
ステファンの声に私は顔を上げた。
「秘密にしていたわけじゃないけど」

ステファンは少し言い淀んだ。
「僕の父親は、エルフの里――悠久の森がある辺境地に接する、アスガルドの辺境伯なんだよ」
そう言って、ステファンは息を吐いた。
「父さんに話して、騎士を出してもらって、公式に会談を求めるかたちにすれば、向こうもうかつに君に手出しはできないと思う」
「辺境伯って……ステファンの実家は、領主様のお屋敷みたいな感じなんですか？」
私はマルコフ王国南部の領主様の大きな屋敷を思い出して身を乗り出した。実家に山があると言っていたし、やっぱりお金持ちなんだ。
ステファンは「うーん」と首をかしげて笑った。
「そうだね。似たような感じかな」
ライガが困惑したように言う。
「お前、今さら実家帰って、親父さん、話聞いてくれるかよ？」
「話してみないとわからないよ。父さんは昔、領地を魔物から取り戻した時に、エルフたちから森へ招かれたことがあるらしい。その縁を頼れば、僕らだけで森へ入るより安全だろ。レイラになにかあっても困るし」
「そりゃあ、そうだけどさ。いや、お前のこと、お前の家族、みんな怒ってると思うぜ。勝手に出てってるだろ、俺たちさあ」
「頭下げるよ。まぁ、怒るだろうけど、聞いてくれないわけじゃないと思うよ」

「そうかねぇ……、まあ、そうか……」
二人のやりとりを聞いていて、私は頭を抱えてしまった。
「私のことで、そんな大事にしてもらうわけには……」
さすがに、申し訳なさすぎる。そんな私の言葉を遮るように、ステファンは強い口調で言った。
「そんなことを言わないでよ。僕らは僕らで、レイラが自分のルーツを知りたいなら、それに付き合うって決めたんだ。協力させて」
「そうだぞ。お前は細かいことは気にすんな」
いいのかな。ステファンの家族にまで迷惑はかけたくない。……でも、お父さんの行方は知りたいし、幽閉されるのも嫌だ。そもそも私だけじゃエルフの森への行き方がわからない。
――私は二人に頭を下げた。
「……ありがとうございます」
「いいって、いいって」
「いいよ、いいよ」
二人が笑うのを見ながら、お茶を飲んで、私はうつむいた。
オリヴァーさんみたいに、白い髭を生やした二人を想像する。ライガはもともと銀髪だから、白髪になってもあまり変わらないのかな。狼姿も白髪になるのかな……？
――その時も私は、今と同じ姿なのかな。多少は背も伸びるのかな。
その時、どんな気持ちで二人を見つめているんだろう。

エルフの里を出てからの五十年をどう生きてきたか、エドラヒルさんに聞いてみたいと思った。

◇◇◇

それから数日、私たちはオリヴァーさんのお屋敷に滞在させてもらいながら、街を観光して過ごした。今日はお礼代わりに、魔法研究所の手伝いに来ている。
ライガとステファンは、書庫の整理をしに行った。私はあまり重たいものは持てないので、オリヴァーさんの研究室で、水晶玉を磨いていた。
「すごくたくさんありますね」
オリヴァーさんに連れていってもらった部屋には、透明な水晶玉だけじゃなくて、紫水晶、黒水晶、白水晶と、さまざまな色の水晶がごろごろ転がっていた。
オリヴァーさんは髭を撫でながら言った。
「儂の専門は水晶研究だからの」
お弟子さんの一人が誇らしげに付け加える。
「対の水晶による通信魔法を確立したのは先生なんだ」
それって冒険者ギルドでよく見かけた、遠くにいる人と話すあれのこと？
皆が当たり前のように使っているあれを発明したのが、オリヴァーさんなの？
「すごい……！」

「先生は水晶に魔法陣を彫り込むことで、距離が離れていても、魔力さえ与えれば顔を見て会話できる方法を考案されたすごい方なんだよ」
お弟子さんの言葉にオリヴァーさんは声を立てて笑った。
「遺跡から出た古代魔法具を真似ただけじゃよ。それもエドラヒルが古代文字を解読するのを手伝ってくれんかったら、できんかったし」
「エドラヒルさん……、今日もお庭にいるんですか？」
名前が出てきたので、気になってオリヴァーさんに聞いた。
エルフのエドラヒルさんともっと話をしたいと、この前から考えていたのだ。
「ああ。お前さんの耳と格闘しとるよ。年月が経ってる分、なかなか手ごわいようでな」
耳と格闘……。言葉だけだと、変な表現だ。
私は申し訳ない気持ちになった。治療費も聞けないまま、エドラヒルさんはなにも言わず耳を預かってくれている。
「今日もお前さん方にまた夕食をご馳走するから、来ないかと誘ったんだが、『行かない』と断られてしまってなぁ……」
オリヴァーさんは寂しそうに呟いた。
「私が話しかけに行ったら、嫌がられてしまいますかね」
そう聞くと、オリヴァーさんは動きを止めて「いや……」と首を捻った。
「よかったら、『夕食を一緒にどうだ』とお前さんからも声をかけてきてもらえないかね？」

オリヴァーさんは少し寂しそうに言葉を続けた。
「……人間にはわからんことも、あるかもしれないしな」

◇◇◇

オリヴァーさんの案内で、私はエドラヒルさんの庭園へ向かう。
「じゃあ、よろしく頼むよ」
あの迷路のような研究所を進んで庭園に着くと、オリヴァーさんは手を振って帰ってしまった。
一人でエドラヒルさんに話しかけるの、緊張するなぁ……
花壇の向こうを見ると、テーブルについているエドラヒルさんがいた。テーブルの上にはお皿が置いてあって、山盛りの野菜……？　というか、花や葉が盛られている。エドラヒルさんはそれをフォークで刺して、むしゃむしゃと食べていた。
「こんにちは……」
恐る恐る声をかけると、エドラヒルさんはびっくりしたのかカランッとフォークをテーブルに落とす。
「……！　なんだ、お前か」
「急に声をかけてごめんなさい！」
驚いて謝ると、むすっとした顔で、エドラヒルさんは「なにか用か」と呟いた。

「いえ……、今、お食事中でしたか？」
私はお皿にのった花を見た。……うん、野菜っていうか、お花。
「お花を食べるんですね……」
思わず呟くと、エドラヒルさんは溜め息をついた。
「エルフは普通、人間が食べるようなものは食べない。特に肉はな」
「そうなんですか？」
驚いて聞き返してしまった。エドラヒルさんは、少し考え込んでから、私を見た。
思わず背筋が伸びる。
「お前は、なにを食べるんだ。人間と一緒か？」
「同じ、ですね。お肉好きです」
「だろうな。――肉を食べている者の、気配がする」
「わかるんですか？」
「生き物を殺して喰らう者には独特の気配がある。お前は、あまり気配がわからないようだな」
私は首を捻った。エドラヒルさんの言っていることがわからない。
「耳がないからだろうな……」
エドラヒルさんは同情するようにそう言うと、反対側の椅子の上を見た。
そこには、大きな瓶の中で薄いオレンジ色の液体に浸かった、私の『耳』があった。
思わず目を見開いた。それは、もう干からびたミイラじゃなくて、エドラヒルさんの髪の間から

外に飛び出している耳のような、尖った長いエルフの耳になっていた。
「だいたい生き返ったよ。魔力を使ったら久しぶりに腹が減ってしまった」
エドラヒルさんは座り直すと、お皿の上のお花を食べはじめた。
「ありがとうございます……」
「数日中には、治療院で手術して、つなげてもらえるだろう」
「よかったです！　耳があると――、その、気配というのがわかるようになるんでしょうか？」
「私は耳がなかったことがないから、わからん。しかし、エルフは最初に音で精霊を感じる。その精霊が動く音のようなものが、私の言う気配だ。魔族も元は同じ種族だろうし、あるとないとでは、当然違うだろう」
エドラヒルさんはそこまで言ってから、神妙な顔をした。
「――お前の周りは、人間ばかりだったのか？」
「はい。つい数カ月前までは、自分は人間だと思っていました。その後、クラフトリンと人間のミックスでは、と言われたのですが、魔族の説が有力になり、今は魔族とエルフのミックスなのかな、というところです」
エドラヒルさんは突然、くっくっと笑い声を漏らした。
「そんなことがあるんだな。聞いたことがない」
……初めて、エドラヒルさんが笑った。
少し空気が和やかになった気がしたので、私は気になっていたことを聞いてみた。

「――あの、エドラヒルさんは何歳なんですか？」
エドラヒルさんは首を捻った。
「わからない」
「ご年齢が、わからないんですか」
びっくりして聞き返してしまった。
「何歳、というのはどういう意味だ？　人の暦で何年生きているかという意味か？　それとも、人でいえば何歳という意味だろうか」
「ええと、何年生きているか、のほうですね」
「エルフの里を出て人の暦で五十年と少しだが、森にいた間が人の世で何年なのかは、わからない。いちいち数えていないからな。ただ、この研究所がまだ城として使われていた頃は、私はまだ子どもだった。成人して森を出たら、城ではなく魔法研究所になっていた」
ここがお城として使われていたのは、百年くらい前までなんだっけ。
その時は子どもだった……と言われてもピンとこない。
「お前は、何歳だ――何年生きている？　人の暦で」
「十六歳……ということになっています」
自信がない言い方になってしまう。……もう自分がなんだかわからない。
「十六年しか生きていないということは、なさそうだが」
驚いて声が大きくなった。

「え、もっと、年上ということですか？」
「『生きている年数が』という意味だ」
……それって、場合によってはステファンたちと同い年か、それ以上ってこと？
ミアラの村が魔物に襲われたのは十四年前。その時、私はもうすでにレイヴィスさんに売られていた。その時、何歳だったんだろう。黙り込んだ私に、エドラヒルさんが言葉を足した。
「なんにせよ、お前はまだ、ほんの子どもだ」
「――人間でいうと、何歳くらいなんでしょうか」
「幼子ではないな。親元を離れて魔法使い学校に入る年頃――少年期くらいではないだろうか」
「つまり、十二、三歳とか、それくらい……でしょうか」
「身体年齢としては、それくらいではないか？」
いえ、まあ、見た目どおりなんだけど……
「なぜ、ショックを受けているんだ」
「いえ、気持ちは十六歳でしたので……」
そう言うと、エドラヒルさんは不思議そうに首をかしげた。
「気持ちが人間の十六歳というなら、十六歳だと思っていればいいのではないか。生きた年数など、ただの数だろう。年が上でも子どものような者もいるし、精神の成熟度というのは、生きた年数とはまた別だ」
エドラヒルさんが言うこともわかるような気もするけれど、私がショックを受けている点とは、

微妙にずれている気がする。
「そういうのとは、ちょっと違う気がします。……周りからの扱いとか、あるじゃないですか」
「たとえば、どのようなことだ？」
私は頭を捻った。
「……酒場に入れなかったり……とかですかね……」
「酒が飲みたいのか。確かに、人間は十六歳から酒が飲めるな」
……そういうことではない、と言おうとしたけれど、エドラヒルさんは話し続けた。
「しかし、精神的な成熟と、身体的な問題は別だ。成長期に酒は飲まないほうがいいというのは、学術的に証明されている。記憶力や判断力、身体的な成長に遅れや悪影響が出る。お前はまだ酒は飲まないほうがよいだろう」
「そうなんですか……。じゃあ飲みません。……じゃなくて、お酒は例です」
「例か。では、他になんの問題がある」
「そう、ですね……」
言い淀んだ私を見つめて、エドラヒルさんは微笑んだ。
「まあ、年長者に見られたいというのも、少年期の発達上の特徴ではあるな」
「……」
そうやってひとくくりにされると、ちょっと嫌な気がする。
私は少しむっとしてエドラヒルさんを見つめた。

エドラヒルさんは困惑したように、長い銀の髪を指に巻いた。
「なにか嫌な気持ちにさせたなら、悪かった」
「いえ、大丈夫です……」
微妙な沈黙が流れた。
エドラヒルさんは立ち上がると、この前もらったのと同じ小さな白い花を花壇から摘んで、私に渡した。
「やろう」
「……ありがとうございます」
私はまじまじとエドラヒルさんを見る。このお花が特に好きって答えたの、覚えていたんだ。
エドラヒルさんは、良い人だ。耳も治してくれているし。
「他に、私に聞きたいことはあるか？　なにか言いたそうな顔をしている」
どこか優しげな声色で聞いてくれたエドラヒルさんに、私は一番気になっていたことを尋ねた。
「――私も、エドラヒルさんやエルフと同じくらい長生きなんでしょうか？」
「それが気になるのか」
「……はい」
エドラヒルさんは、少しだけ目を細めた。
「わからない。お前にはエルフの血が混ざっているようだが、魔族のほうが寿命が短いと聞く」
「そうなんですか？」

「食生活も関係しているのではないかと思っている。魔族は肉を喰らう。一方、里のエルフはほとんど食事をしなくても生きていける。身体が精霊に近い存在だからな」

一度にいろいろな話を聞いて、頭の中がこんがらがる。

「私も人間に交ざって食事をするようになってから、里にいた頃より老けた気がする」

「それで老けたんですか!?」

思わず大きい声で聞き返してしまった。

だってエドラヒルさんは、どう見てもステファンと同じくらいにしか見えない。

「里にいる同年代の者よりは、老けていると思う」

「その、エルフは何歳くらいまで生きるんですか……？」

「人間の暦で何歳まで生きるかは、わからないな。私も自分の年がわからないように。……生き方によっても違う。子がいるエルフは早く森に還ってしまう。私の両親は、もう森に還った」

「『森に還る』？」

「人間にとっての『死』とでも言うべきか。天命を終えたエルフは、悠久の森で木に戻る」

目をぱちぱちとする私を見て、エドラヒルさんは苦笑した。

「本当になにも知らないのだな」

エドラヒルさんは考えるように髪を弄った。

「……なにから教えるべきか」

エドラヒルさんは花壇の縁に腰かけると、私にも隣へ座るよう促した。

「エドラヒルさんは……どうして、エルフの里から外に出てきたんですか？」

エドラヒルさんは少し考えた後、私の顔を見て笑った。

「……美味い食事が、食べたかったからだ」

それから、エドラヒルさんは思い出すように言葉を続けた。

「もとから里の暮らしが窮屈でな。外の人間の世界に興味があって、よく森を抜け出していた。ある時、魔物に襲われていた辺境民を助けたら、お礼に食事を振る舞われた。魔物の肉を焼いたもので……臭いが、癖になる味だった」

私は遠い目をするエドラヒルさんからテーブルの皿に盛られた花へ視線を移し、首をかしげた。

「……エドラヒルさん、お肉食べるんですか？」

山盛りのお花を食べているみたいだけど。

「……むしろ、好んで食べていた。少量しか食べられないがな。あまり食べると腹が痛くなる。しかし、臭みや苦い味がたまらなくて……」

エドラヒルさんは大きく溜め息をついた。

「しかし、里で肉を食べることは禁忌だ。辺境民と食事をしたことが知られ、私は罰を受けた。といっても、しばらくの間、里で皆の食料となる花を育てる役目をやらされただけだが。しかしあの食事の味が忘れられなかった私は、成人してから里を出た」

「今は食べないんですか……お肉？」

『食べていた』と過去形なのが気になって、私は聞いた。

それが理由でエルフの里を出たくらい好きなのに……なんで今は食べてないんだろう。
エドラヒルさんはまた溜め息をついてから話し出した。
「――里に戻ろうと思ってな。こちらの食べ物を口にしすぎたせいで、今のまま帰っても里には入れてもらえないだろう。だから、身体を元に戻さねばならん」
「里へ戻るんですか！　出てきたのに、なんで……」
せっかく自由に好きなものを食べられるようになったのに、なんで戻るんだろう。
「お前には、まだわからんだろうな。生きる時間の違う者たちと暮らすのは、なかなか難しい。いつの間にか友人も、誰も彼もみんな老いて死んでしまう」
エドラヒルさんは遠い目をして呟くと、私に笑いかけた。
「ただ、お前は人間の食事にも馴染んでいるようだし、私たちエルフより身体や時間の流れが人間に近いのかもしれん。以前、『どこかに潜んで暮らしたほうがお前の身のためだ』と言ったのは、エルフの里へ近づいても良いことはないと思ったからだ」
形のいい眉根を寄せて、エドラヒルさんは唸った。
「あそこは閉鎖的で、外の者を受け付けない。お前は、このままこちらで暮らしていたほうが幸せだろう。……言い方がきつくなってしまったのは悪かったな」
エドラヒルさんも、私のことを心配してくれている。でも……
私はエドラヒルさんを見つめてはっきり言った。
「でも、私は、エルフの里に行くつもりなんです」

エドラヒルさんは紫の瞳を大きく見開いた。
「な……」
「お父さんのことを知りたいですし、行くつもりです」
「行ったら大騒ぎになるぞ？　幽閉と言ったのは大げさではない。閉じ込められてずっと花ばっかり食わされるかもしれない」
花ばっかり……
「それは、嫌です。そうならないように、ステファンが協力するって言ってくれました」
「あの、狼憑きではないほうの人間か。どうするつもりだ。一介の冒険者になにができる？」
「ステファンのお父さんが、アスガルドの辺境伯なんだそうです。お父さんを通じて、エルフにお話の場を作ってもらえるよう、相談してくれるって……」
そこまで話したところで、私はエドラヒルさんが目の色を変えたことに気づいた。
「《オーガ殺し（キラー）》のアスガルド辺境伯が、あいつの父親なのか？」
「……お知り合いですか？」
「いや、奥方をよく知っている。元々魔法使いギルドにいた優秀な魔法使いだった。……道理で、顔が似ているわけだ」
エドラヒルさんは深く息を吐くと、話を続けた。
「アスガルドのマーゼンス辺境伯は、辺境民を喰らって増えたオーガを駆逐し、アスガルドの領地を取り戻した男だ。辺境に増えたオーガはエルフにとっても邪魔な存在だから、それを滅ぼしてく

れた辺境伯が申し出るなら、確かにエルフ側も話を聞くかもしれない」
私は希望が見えて、手を握りしめた。
エルフのエドラヒルさんがそう言うなら、ステファンのお父さんに力を貸してもらえれば、エルフの里の人たちとお話しできる気がしてきた。
「――しかし、お前は、父親らしきエルフのことを聞いてどうするつもりだ？　推測ではあるが、お前の母親が魔族であるならば、お前の父親は魔族とつながった罪で幽閉されていると思うぞ」
「それなら、おかしいって言います。お父さんを出してあげてくださいって」
自分でも無意識のうちに声が大きくなってしまった。
「どうして、私のお母さんが魔族だったというだけで、お父さんが捕まらなきゃいけないんですか？　それって悪いことなんですか？　思い出したんです、私。お父さんは、とっても私のことを大事にしてくれてたって。私はちゃんと、大切に思われてたって」
まくし立てているうちに、言いたいことがまとまらなくなってきて、ぼろぼろ涙が溢れてきた。
「なんで、そんな魔族だからとかで、ひどいことされなきゃいけないんですか。だって、なにもしてないのに、お父さんは連れていかれちゃって、私は一人で置いていかれて、キアーラに連れていかれて、寂しかったし、耳もなくなっちゃうし」
「……落ち着け、とりあえず……」
エドラヒルさんは困り果てたように、わたわたと手を動かした。
私は目をごしごしこすると、エドラヒルさんに言った。

「だから、言います。お父さん返してって」
エドラヒルさんは、泣いている私をしばらく見つめた。
なにかを言いかけて唇を開き、けれど、結局は言葉にせずに頷いた。
「……そうか、わかった」
そこで私ははっとした。
別にエドラヒルさんがお父さんを連れていったわけじゃないのに、感情的になってしまった。申し訳ない気持ちでいっぱいになる。
「すみません。エドラヒルさんに、こんなこと言っても仕方ないんですけど」
「いや。いいんだ。エルフとして……申し訳ないとは思う」
それから自分の花壇を指さして言った。
「そ、そうだ。欲しい花があれば、どれでもやろう」
「……ありがとうございます。でも、せっかく育てているものをあんまりいただくのも、悪いですから」
「いくらでも咲かせられるから、遠慮しなくてもいいぞ」
エドラヒルさんは少し得意そうに頷いた。
「そうなんですか？」
「ああ。見ていろ」
エドラヒルさんは、花壇横にある物置棚の引き出しからなにかを取り出すと、手にのせて私のほ

うに差し出した。覗き込むと、手のひらには花の種のような小さな黒い粒がのっていて、そこからにょきにょきと緑の芽が伸び、あっという間にぽぽぽぽんと白い花が咲いた。
「わぁ！」と歓声を上げると、エドラヒルさんは満足そうに笑って、咲いた花を私の両手に押しつけた。
「持っていけ。また花が欲しければ、私のところに来い」
「ありがとうございます！」
嬉しいけど、どうしようかなぁ。オリヴァーさんのお宅で借りている部屋に飾らせてもらおうかな。
そこでようやく、私はエドラヒルさんのところに来たそもそもの目的を思い出した。
「そうだ。オリヴァーさんが、今日も夕食を私たちにご馳走してくれるそうなんです。それで、エドラヒルさんも一緒にどうですかって、私、聞きに来たんです」
「いや、私は……」
「ご飯、みんなで食べたほうがおいしくないですか？　エドラヒルさん、そちらのお料理を食べている時、あんまりおいしそうじゃなかったから……」
私はちらりとテーブルの上のお皿を見た。
「よかったら一緒に食べましょうよ」
「いや……」
エドラヒルさんは、溜め息をついて髪を掻き上げた。

私はもう少し押してみることにした。
「あのマンドレイクのソース、おいしかったです。ほかにも種類があるんですか？　熱くなるものや、冷たいものや……今まで食べたことない味で面白かったです！」
「……びりっと痺れる雷属性のソースも作ったが、オリヴァーに却下された」
「そうなんですか！　それも食べてみたいです……」
エドラヒルさんは一瞬目を丸くした。
「そうか。食べてみたいか」
エドラヒルさんは頷くと、ふっと笑った。
「お前の口には合うかもしれん。夕食までに作って持っていってやろう」

◇◇◇

庭園を離れた私は白い花を両手に抱えて階段をぐるぐると上り、来た道を戻った。
来る時はオリヴァーさんに案内してもらったからよかったけど、私一人で入り口まで戻れるかな。
そう考えながら階段を上りきったところで――
「どうじゃった？　あいつは、夕食を食べに来ると言っておったか？」
オリヴァーさんがぬっと顔を出したので、私はびっくりして後ろに跳ねた。
「あっ、はい。……あのマンドレイクのソースの、雷味を作って持ってきてくれるって言っていま

した」
「そうか！」とオリヴァーさんは嬉しそうに頷いてから、「あれは不人気でお勧めしないんだがの」と笑った。
「オリヴァーさんに却下されたって、言っていましたよ」
「そうなんだよ。あいつの味覚はちょっとおかしくてな。肉も『臭い』だの、『このクセが堪らん』だのと言いながら食うし。エルフの味覚っていうのはわからん」
「……私の味覚は普通だと思いますけど」
そう答えて、私は今いる階段の上から、庭園が見下ろせることに気がついた。
オリヴァーさんは私がエドラヒルさんと話しているのを、ずっと見守っていたのかもしれない。
「オリヴァーさんとエドラヒルさんって……昔からのお友達なんですか？」
「儂がまだ若く、髪も真っ黒で……将来有望な魔法使いとして女性にもモテモテだった頃からの知り合いよ」
「オリヴァーさん、黒髪だったんですね。ソーニャは綺麗な赤毛ですけど」
「……気になるのはそこなんじゃな。ソーニャは儂の家内に似たんじゃ。家内も綺麗な赤毛じゃった。姉さん女房でな、三年前に先に空に行ってしまった。ソーニャの母親、儂の末娘も赤毛じゃよ」
「そうなんですか……」
「エドラヒルを魔法使いギルドに引っ張ってきたのは儂での。遺跡調査で辺境へ行った時、魔物の肉を焼いて食べている珍しいエルフがいたんだ。話をしてみたら、古代文字も読めるし面白いやつだったんで、魔法使いギルドに来てみないかと誘ったんじゃ」
オリヴァーさんは少し遠い目をして呟いた。
「それからもう五十年じゃよ。早いもんだ」

◇◇◇

その夜も、研究所の食堂でオリヴァーさんのお弟子さんたちがいろいろな料理を出してくれた。
「エドラヒルさん、来ないですねえ」
私はぱくぱくと料理を口に運びながら呟いた。
「あいつも来るのか？」
狼姿になってがつがつ食べていたライガが、不満そうに鼻先に皺を寄せた。
ライガはエドラヒルさんの最初の印象、悪かったもんね……
「エドラヒルさん、話してみたら優しい人だったよ」
そう言ったところで、後ろから「作ってきたぞ」と声がした。私たちが驚いて振り返ると、エドラヒルさんがお皿を持って立っていた。「ほら」と突き出された器の中にはオレンジ色のソースが入っていて、ばちばちと光る黄色い渦がぐるぐる回っている。
「雷のマンドレイクソースですね！」

本当に作ってきてくれたんだ。
驚きながら器を受け取り、肉にソースをつけて口に入れた。
ばちばちっと音がして、口の中にびりびりした痺れが走った。
そのままあまり噛まずに、ごくっと呑み込む。
「どうだ」
「……なんていうか、味がしなかったです……」
炎と氷のやつは、熱さと冷たさの間に味わいがあったんだけど、これは味自体がわからない……
「お前でもそうか。――私は結構、食感に変化があっていいと思うのだが」
残念そうに呟くエドラヒルさんを、ステファンとライガが奇妙なものを見るような目で見た。
それはそうだよね。急に後ろからソースを持って現れたら、びっくりするよね。
「私が、雷のソースを食べてみたいってお願いしたから、作ってきてくれたんです」
そう補足して、「ありがとうございます」とお礼を言った。
「エドラ！　来たのか」
オリヴァーさんは嬉しそうに声をかけ、自分の隣の椅子を引いて「来い」と手招きした。
オリヴァーさんはこういう時は、エドラヒルさんのことを「エドラ」って呼ぶんだ。
……エドラさん……そのほうが呼びやすいかもしれない。
お弟子さんがエドラさんに、肉を少しだけ盛った皿を持ってきてくれた。エドラさんはそれをフォークで刺すと、口に運んでもぐもぐと食べて、一言「うまいな」と呟く。

それから、ステファンをじっと見て、声をかけた。
「お前は、アスガルドのマーゼンス辺境伯の息子なのか？」
オリヴァーさんが「えっ」と驚いたような顔でステファンを見る。
ステファンは急に話しかけられて、少し戸惑ったように目を瞬かせた。
「あ、私がさっき、話しちゃいました。エルフの森に行くのに、ステファンのお父さんに相談してもらうって……」
慌てて話すと、ステファンは「ああ」と合点がいったように頷いた。
「――そうです」
どこかためらいがちに答えたステファンに、エドラさんは前のめりになって聞いた。
「なぜ、冒険者などをしている。家に帰らなくていいのか？　親が心配しているだろう」
「いえ、いろいろと事情がありまして……」
ステファンは困ったような顔をしながら、言葉を濁した。
エドラさんはステファンの反応など気にせず、矢継ぎ早に聞いた。
「ステファン、お前の母親は――イザベラは元気か？」

◇◇◇

イザベラ――それは母さんの名前だ。

まさかここで母さんの名前が出てくるとは思わず、僕は驚いた。
「母をご存じなんですか？」
確かに、僕の母親は魔法使いだから、知っていたとしても変ではないんだけど……。昔の知り合いかなにかだろうか？
「よく知っている」
エドラヒルさんは、それだけ答えた。
『よく』知っている？　ずいぶん気になる言い方だなあ。
「どういったお知り合いですか？」と聞こうとすると、オリヴァーさんが補足してくれた。
「イザベラはもともとここの魔法研究所にいたんじゃよ。エドラヒルと一緒に研究をしていたんじゃ」
「え」と僕は思わず声に出した。
「イザベラからなにも聞いておらんのか」
オリヴァーさんの言葉に口をぽかんと開けてしまう。
魔法都市の研究所にいたなんて、聞いたことがない。
父さんと結婚する前に、魔法使いの修業をしていたとは聞いている。けれど、本格的に研究者として働いていたとは、母さんから一度も聞いたことがなかった。
「聞いたことは、ないですね」
そう答えると、オリヴァーさんは「そうか」と呟いた。

「まぁ、二十五年以上前の話になるからなぁ。儂もイザベラがマーゼンス殿と結婚されてからは何度か手紙のやりとりをしたくらいじゃ。イザベラとマーゼンス殿は、結婚式も身内で済ませてしまったしのう」
父さんが母さんと結婚した頃は、領地から魔物を追い出したばかりで、式らしい式もしなかったと聞いている。母さんは父さんの後妻だし、父さんの前の家族は全員亡くなっているから、そういう事情もあったとは思う。
「いや、しかし世間は狭いな、エドラ」
オリヴァーさんは、ぽんっとエドラヒルさんの肩を叩いた。
「顔が似ていると思ったんだ。お前は、母親似と言われないか？」
「……はい。そう言われることが多いです……」
そういえば最初に会った時、『知り合いに似ている』と言っていたもんな。……母さんのことか。
僕は母親似、弟は父親似、妹は中間だ。それでも、別にそっくりというわけでもないし……気づくのもすごいな。
「言われてみれば、確かに似ているかもしれないなあ。しかし儂は気づかなかったよ」
オリヴァーさんは髭を撫でながら言った。
……普通はそうだと思うけれど。
「――それで、元気か？　イザベラは」
銀の髪を指でくるくると巻きながら、エドラヒルさんはぶっきらぼうに聞いてきた。

――随分と、親しそうな聞き方だなあ。
僕は困惑しながら答えた。
「元気だと思いますよ。……もう五年ほど会っていませんけど」
「そんなに家に帰っていないのか。――イザベラは心配しているのではないか？」
さっきからなんなのだろう、エドラヒルさんの、まるで親戚のようなこの距離感は。
「いえ、僕のことは、そんなに心配していないと思います」
優秀な弟や妹もいるし、母さんも僕がいなくなって、逆にすっきりしてるんじゃないだろうか。
「そんなことはないだろう」とエドラヒルさんは神妙な顔で呟いた。
「イザベラが息子のことを、心配しないはずがない」
「そうでしょうか……」
「心配していると思うぞ」
「……」
本当に、どういう距離感なんだ、この人は。
「エルフと交渉するために、マーゼンス辺境伯の力を借りると言っていたが、家に帰るのか？」
「僕らだけで悠久の森に行っても、エルフの里に行けるかわからないですし、レイラになにかあっても困りますからね。情けないですけど、家に戻って父に話してみようと思っています」
エドラヒルさんは銀の髪を指で弄びながら、しばらく考え込んだ。
みんながその沈黙を見守る中、エドラヒルさんは顔を上げ、唐突に言った。

**立ち読みサンプル
はここまで**

「私もついていこう」
僕とレイラとライガは顔を見合わせた。
「お前の家に、私もついていく。《オーガ殺し》の辺境伯殿と私がそろえば、万全ではないか？」
エドラヒルさんは一人で頷いた。
「エルフの里への行き方は、私がわかる。同族が一緒にいたほうが、話が早いだろう」
エドラヒルさんはレイラを見つめた。
「それでどうだ。……レイラよ」